

富谷市 文化財標柱・標示板 解説文

| | 名称 | 解説 |
|---|-------------------------|--|
| 1 | しと だようすい どう 志戸田用水ずい道 | 昔から米作りが盛んな志戸田は、わずか 10 坪の田んぼから四斗（よんと、しと）の米が取れたことから、四斗田が志戸田になったと伝えられている。しかし江戸時代には、日照りが続いたり、用水路が洪水で壊されたりと、志戸田の人々は水不足に悩まされていた。1750 年ごろの肝入（今の村長）であった千坂半左衛門は、人々の苦しみをみて志戸田の水不足を解消しようと、自分の財産を使って用水路を作り直す工事を始めた。用水路内の崩れやすい所では、ずい道（トンネル）を掘り、ずい道は 3ヶ所で 600mにも及んだ。地面の中を掘り進めるずい道の工事は、道具も十分でなかったこの時代にとっても大変な作業であった。中でも 3号ずい道では、途中にゴミがつまらないための仕組みも考え出された。用水路とずい道の工事は、半左衛門が活着している間では終わらず、息子である半右衛門、孫の清信の三代にわたり、ようやく完成したと伝えられている。 |
| 2 | ゆきじんじや 行神社 | 奈良平安期に、国が奉齋する神社名を記した神名帳に登録された神社を「式内社」と呼び、陸奥国に百座、黒川郡には四座が祀られているが、行神社はそのうちの一社である。行神社の祭神は猿田彦命である。神社名から「行く」の意味で考えると、一種の道祖神、岐神となり往環の守り神と考えられる。「行き」を韌ととると、軍事の神として祀り、大衡にある須岐神を鋤神ととらえ、農業の神として蝦夷経営にあたったとも考えられる。また、大嘗祭の時には東に悠紀殿、西に主基殿の 2 殿が特設されて祭儀がとり行われるが、富谷の「ゆき」大衡の「すき」はみちのくの朝廷多賀城と結びつけると、何らかの関係が考えられる。 |
| 3 | さんがもりいせき 三ヶ森遺跡 | この遺跡は、舌状に張り出た丘陵上に立地しており、古くから土器や石器が散布していた。平成 10 年に国道 4 号の拡幅に伴い路線部分の発掘調査を実施した結果、縄文時代・平安時代・中世・近世にかけての複合遺跡であることがわかった。特に平安時代初期の区画溝は真北方向を基準につくられており、古代黒川地方の中心的な施設との関連性が考えられる。 |
| 4 | はせとりじょうあと 馳取城跡 | この館跡は、江戸時代に仙台藩から幕府へ書き上げた『仙台領古城書上』などの文献や伝承から、中世黒川地方を治めていた黒川安芸守の長男、長三郎（長太郎・甚三郎とも）春氏が居城したとされている。丘陵上には建物が建っていたとみられる平場や、それを取り囲むように空堀や土塁などの防御施設が見られる。 |
| 5 | もんぜんじょうあと 門前城跡 | 正面の山頂部が城跡である。この山頂に石の祠があり、この祠を中心として、東西約 50m、南北約 20mの平地と、これを取り巻く数段の郭がある。仙台藩から江戸幕府へ書き上げた『仙台領古城書上』などの文献や伝承によると、東西四十三間、南北三十六間、城主は二ノ関伊予、天正年中（1573～1592）まで居住とあり、伊達家の家臣二ノ関傳之助の先祖であると伝えられている。 |
| | どうせいきようづつ 銅製経筒 | 門前城跡の山頂部にある館山経塚から寛政 9 年（1797）に経筒が発見され、以来地区のご神体として石の祠に安置されていた。この経筒は銅製の円筒形で、蓋と筒身からなり、高さ 22cm である。筒身には埋納の趣旨、永和 2 年（1376）の年号等が彫刻されている。中世を知る上で貴重な遺物として、昭和 50 年に宮城県の有形文化財に指定され、現在は東北歴史博物館に収蔵されている。 |

| | | |
|----|--------------------------------|---|
| 6 | ちょうらくじかんのんどう 長楽寺観音堂 | この観音堂は黒川三十三観音の第三十番札所で、御詠歌「煩惱の雲はれてゆく <small>ぼんのう</small> <small>いちのせき</small> 一ノ関まして真如 <small>しんによ</small> の月をながめて」と唱和され、大勢の信者に信仰されてきた。 ここに祀られているご本尊は秘仏で、「戸を開けると目がつぶれる」という言い伝 えを守ってきたが、昭和36年檀徒による清掃中に、御本尊を隠していた戸がはず れて御姿を現した。宝冠を戴き金色に輝く観音様の傍らに、高さ12cm程の石像が 発見された。底部に十字が刻まれており、キリシタン信仰に関係のあるのではない かと考えられている。記録によると元和・寛永頃、当地方にはキリシタン信者が多 く、その後弾圧が厳しくなったため秘仏として祀り、礼拝したものと思われる。 |
| 7 | どうやだてあと 堂谷館跡 | この館跡は、江戸時代に仙台藩から幕府へ書き上げた『仙台領古城書上』などの 文献や伝承によれば、中世にこの地方を治めていた黒川安芸守の家臣、成田外記が 天正年間(1573~1592)まで居城したとされ、その規模は東西十三間、南北三十一 間とされる。東、西、北側が断崖 <small>だんがい</small> で囲まれ、山頂部には本丸跡とみられる平地があ り、また周囲には数段の郭がみられる。 |
| 8 | と たいしどう いぼ取り太子堂 | 三ノ関字太子堂上に「聖徳太子」と刻まれた石塔 <small>せきとう</small> が祀られている。このような石 塔は、職人講の一つである太子講の人々が造立したのと考えられる。 また、「いぼ取り太子堂」としても信仰されている。いぼが出たら参詣し、供え てある小石でいぼを擦れば、たちどころに消えるといわれ、治った人は石を2倍に して返す習慣がある。 |
| 9 | やくもんじんしゃ 八雲神社 (ひより台) | 富谷新町、北入り口の高台に鎮座している。天保の大凶作に当たり疫病 <small>えきびょう</small> がこの 地一帯に流行したので、柴田町槻木の入間田から祇園社 <small>ぎおんしゃ</small> として勧請した。祭神は、 <small>つきのき</small> 月夜姫 <small>いりまだ</small> 入間田 <small>ぎおんしゃ</small> 祇園社 <small>かんじょう</small> 勧請した。祭神は、 <small>こずてんのう</small> 牛頭天皇 <small>すさのおのみこと</small> または素戔嗚命 <small>やくびょうがみ</small> ともいわれる。牛頭天王は疫病神の主として知られ、天 王を祀れば疫病はただちに平癒 <small>へいゆ</small> すると考えられていた。 |
| 10 | だいかんまつ 代官松 | 藩政時代、大谷郷を除いた38ヶ村を支配下におく代官所が、この地におかれた。 この代官所の玄関前に植えられていたことから、明治より代官松の名で親しまれ てきた。明治4年(1871)以降代官所は役場の施設として使用されたらしく、学制 <small>はんぶ</small> 頒布の翌年の明治6(1873)年7月からは、富谷小学校の校舎として使用され、 昭和49年度末まで101年間、児童とともに大事にされてきた。この間に何度か危 機にあったがその度に手厚い保護がなされ、見事な枝振りとなっている。この松の 樹齢については記録がなく不明ではあるが、200年位といわれている。郷土の象徴 として本町の代表的名木となっており、市の天然記念物となっている。 |
| 11 | ほううだい 北雲台 | 北雲台は、初代内ヶ崎織部夫妻 <small>うちがさきおりべ</small> をはじめ、歴代の内ヶ崎一族の墓所である。織部 <small>ちくご</small> は前名を筑後といい黒川氏に仕える家老職だったが、天正18年(1590)に主家が 除かれたあとは仕官せず帰農した。元和4年(1618)政宗公に召しだされ、宿場づ くり <small>けんだん</small> に励み、のち検断として郷土の発展に尽くした。織部夫妻の墓の傍らには、 樹齢300有余年といわれる老杉が立っている。 |
| 12 | うちがさきけべていゑん 内ヶ崎家別邸庭園 | 内ヶ崎文之助(現在の内ヶ崎酒造店)が、明治時代の後期(1900年前後)に、 社会救済事業のひとつとして築造した。回遊式の庭園で、桜や楓など四季の眺めが 楽しめる。樹木の多くは大和町宮床の伊達家館跡から移植したという。庭園内に小 <small>たいざんかく</small> 高く建つ対山閣は、元首相の若槻礼次郎によって名づけられたものである。昭和62 (1987)年、河北新報社によるみやぎ新観光百選に選ばれている。 |

| | | |
|----|---------------------------------------|---|
| 13 | わきほんじんあと 脇本陣跡 | <p>脇本陣は本陣につぐ格式をもち、名望家の氣仙屋が仰せ付けられた。盛岡定御宿や松前定御宿、八戸定御宿などの関札が残されている。東講や浪花講など、江戸と大坂にある旅籠格付けの講元から認定された旅宿でもあった。</p> <p>明治9年(1876)6月30日、明治14年(1881)8月14日、明治天皇が東北・北海道への行幸のとき御小休なされた。</p> |
| 14 | とみがおかこうえん 富ヶ岡公園 | <p>富ヶ丘公園は、内ヶ崎家の所有地であった富谷南裏の丘陵地帯を切り開いた村営の公園として、明治24年(1891)頃開設された。当時この地方ではまだ公園が珍しかった。地形を巧みに利用して松や桜などを植え、見晴らしのよい所には四阿が建てられている。近くに見える七ツ森と、船形山や泉ヶ岳の遠望は、一幅の山水画を見るような趣がある。</p> |
| 15 | びしゃもんどう 毘沙門堂 | <p>毘沙門は、古代インドの神話に見られるが、のちに仏教にとりこまれた。帝釈天のもと四天王の一つとして、財宝富貴をつかさどり、仏法護持に努めるとされる。室町時代以降には名も毘沙門天となり、のち七福神に組みいれられた。本毘沙門堂の勧請年月は明らかでないが、安永3年(1774)の『風土記御用書出』に、ご本尊や祭日などが記載されている。</p> |
| 16 | やくもじんじゃ 八雲神社 どう まえ (堂の前) | <p>富谷新町、南入口の高台に鎮座している。天保の大凶作にあたり疫病がこの地一帯に流行したので、柴田町槻木の入間田から祇園社として勧請した。祭神は素戔鳴尊、あるいは牛頭天皇ともいわれている。牛頭天王は疫病神の主として知られ、天王を祀れば疫病はただちに平癒すると信じられていた。6月9日、12月9日には心をこめた祭りがとり行われる。</p> |
| 17 | ほんじんあと 本陣跡 | <p>本陣は宿場に設けられた大名や幕府役人が休泊した施設である。元和6年(1620)に富谷が開宿したのち、検断や肝入を務めた内ヶ崎家が本陣を仰せ付けられた。南部信濃守宿、松前志摩守寓、田村左京太夫宿などの関札が残されている。</p> <p>当時の建物の詳細は不明であるが、現存する有壁の本陣(栗原市・金成)と同じような造りであったと考えられている。</p> |
| 18 | くまのじんじゃ 熊野神社 | <p>平安末期頃より熊野詣が盛んになり、武士の間でも広まった。また、この頃から東北地方にも多くの熊野神社が勧請された。中でも名取の熊野三社は特に有名である。富谷の熊野神社の勧請年月日は不明であるが、伝承によると現在地より東方に鎮座していたが、元和4年(1618)伊達政宗公の命により宿場を開設した折に、現在地に移転したといわれる。祭神は熊野夫須美命、伊弉諾命、伊弉冉命である。また、明治41年(1908)に日吉神社、雷光神社が合祀されている。当神社には色々な絵馬が奉納されているが、句会の絵馬2面があり、天保から明治にかけ富谷の句会の盛んだったことを示している。</p> |
| 19 | とうせんじ ちょうこく 湯船寺の彫刻 | <p>本町第一の巨刹である松澤山湯船寺は、慶長年間に現在吉岡にある中興寺七世の異岸文秀により開山された。初め町上のはずれの湯船沢の地に建立されたが、湯船寺十世心海覚舟和尚の時に現在地に移転した。この寺の本堂の欄間には、寺宝の「金龍」と「牡丹に唐獅子」がある。「金龍」の彫刻は文政11年(1828)8月、仙台の北鍛冶町の住人で、下網屋金助こと宝力軒雕龍が彫り上げたものを、富谷新町の梅津屋七兵衛から寄進されたものである。また「牡丹に唐獅子」2面は、檀家の婦人方による寄進である。いずれも市の有形文化財に指定されている。</p> |

| | | |
|----|---------------------------------------|---|
| 20 | たていし 建石 | <p>安永3年(1774)の『風土記御用書出』によると、「但往古石より米湧出候迎穀田村と申候由申伝候、米不足ニ出候、間口ヲ明候迎所之者石ヲ割候由ニ而只今ハ石弐ツニわれ有之候・・」とあり、昔石から米が湧き出したのでこの地を穀田と呼んだという。この建石は長さ約2m、幅約70cm、厚さ15cmの長方形の砂岩で、中央から2つに割れている。正面には苔が生え文字らしきものは見えず、裏面は掘りおこさないと見られない。置かれた場所や石の大きさからいって、道しるべ的なものではなく、かつては縦に建てられ、神か仏かに関係する碑ではなかったかと推定される。参拝した人々があげた米が付近の田に散らばったものと思われる。</p> |
| 21 | ししはなじょうあと 鹿鼻城跡 | <p>この館跡は、江戸時代に仙台藩から幕府へ書き上げた『仙台領古城書上』などの文献や伝承によれば、永禄年間(1558~1570)に黒川家の家臣であった平山長右衛門重国が居城し、その後安藤丹後守の居城となったが天正末頃に黒川安芸守と共に滅んだとされている。丘陵上には建物が建っていたと考えられる平場や、平場を防御する施設が随所に見られる。</p> |
| 22 | とみや たうえおどり 富谷の田植踊 はら (原) | <p>原の田植踊りの発生時期は不明だが、天正20年(1592)正月、伊達政宗公が七ツ森で催した鹿狩の際にこの踊りを披露し、伊達家の家紋である「竹に雀」のうち「竹」を衣装に用いることが許されたと伝えられている。</p> <p>歌と笛、太鼓に合わせて早乙女と弥十郎が踊るもので、昔は正月に家々をまわり踊り歩いた。昭和35年に県無形民俗文化財に指定され、現在は原地区を中心として組織された保存会によって「富谷小学校伝承芸能クラブ」の子どもたちに伝えるなど、後継者の育成に努めている。</p> |
| 23 | はらまえみなみいせき 原前南遺跡 | <p>この遺跡は、標高30mの丘陵に立地している。昭和47年12月に東北自動車道関連で部分的に発掘調査が行われた。発見された遺物や遺構などから縄文時代から奈良・平安時代の遺跡であることがわかった。特に奈良時代初期の遺物として、関東地方の影響を受けた土器が出土し、関東からの移民との関わりを知る上で大変貴重な発見であった。</p> |
| 24 | なら きじょうあと 奈良木城跡 | <p>この館跡は、江戸時代に仙台藩から幕府へ書き上げた『仙台領古城書上』などの文献や伝承によれば、東西六間、南北十間の規模で、城主は不明である。中世の館跡とみられ、江戸後期の絵師、吉川十兵衛が文政6年(1833)に描いた大童村や富谷村の絵図にも「サクラタテ」として描かれている。山頂部には本丸跡とみられる比較的狭い平場があり、北方の鶴巢館へ通じる道が山中にあったとされる。</p> |
| 25 | おおわらだてあと 大童館跡 | <p>この館跡は、江戸時代に仙台藩から幕府へ書き上げた『仙台領古城書上』などの文献や伝承によれば、中世にこの地方を治めていた黒川安芸守家臣の大童豊後が天正年間(1573~1592)まで居城したとされている。一説には天正5年(1577)まで一族が居住しており、その間約84年といわれている。東西七間、南北十八間で、北側に空堀があるとされている。</p> |
| 26 | しらとりいせき 白鳥遺跡 | <p>この遺跡は、小高い山に周囲を囲まれた沢部に位置し、平成9年の県道工事に伴って発見された。発掘調査の結果から、縄文時代から奈良時代にかけての複合遺跡であることが分かった。特に奈良時代後半の掘立柱建物跡や柵列跡、土器や木製品等が出土し、中には墨で文字の書かれた器や硯の破片等もみられたことから、当時の役所に関係する施設の可能性も考えられる。</p> |

| | | |
|----|---|--|
| 27 | と や また た て あ と 鳥屋又館跡 | この館跡は古い文献に記録が無く、その規模や城主、年代等について不明であるが、江戸時代後期の絵師である吉川十兵衛が、文政6年(1823)に仙台藩へ書き上げた、大童村や成田村の実測による絵図面には「トウクリタテ」として描かれている。周辺にはほぼ同じ時代の館跡として、大童館跡、奈良木城跡、熊野館跡等があり、相互の関連も考えられる。また、山頂部には本丸跡と考えられる比較的広い平場がみられる。 |
| 28 | えい に ん こ ひ 永仁の古碑 | 今泉と大童の境界付近、居久根山 <small>いぐねやま</small> と呼ばれる山林の山際に3基の碑が並んでいる。その向かって左の碑に「永仁三年十二月 日」と刻まれ、その上に阿弥陀如来 <small>あみだによらい</small> を表す梵字の「キリーク」が彫り込まれており、この碑は中世の供養塔 <small>くようとう</small> の一種と考えられる。永仁3年(1295)は、元寇 <small>げんこう</small> の再来から14年を経過した年で、鎌倉時代の末にあたる。 |
| 29 | あまつりゆうなんぶがくら 天津流南部神楽 はちまんじんじゃ (八幡神社) | 今泉に伝わる神楽は天津流南部神楽と呼ばれ、大正3年(1914)に南方村 <small>みなみかたむら</small> (現登米市)の行商人が今泉地区の若者たちに伝えたのが始まりとされている。春に催されている八幡神社の祭典などで、五穀豊穰や家内安全などを祈願して奉納されており、市の無形民俗文化財に指定されている。 |
| 30 | くまのだてあ と 熊野館跡 | この館跡は、江戸時代に仙台藩から幕府へ書き上げた『仙台領古城書上』などの文献や伝承によれば、城主は成田源兵衛 <small>なりたげんべえ</small> で天正年間(1573~1592)まで居城したとされ、規模は東西五十間、南北四十間とある。山頂部にある熊野神社の境内が本丸跡と推定され、その東側には数段の平場があり、また西側には堀切等の防御施設もみられる。 |
| 31 | くまがいたてあ と 熊谷館跡 | かつてこの地にあった熊谷館は、近世の古文書『仙臺領古城書上』によれば熊谷という野武士が居城したといわれる中世の山城である。区画整理事業に伴い平成8年から3年かけて大規模な発掘調査が行われ、その結果、丘陵頂部からは、削平し平場とした主郭や副郭が確認され、主郭には掘立柱建物跡が数多く認められた。また、丘陵尾根からは堀切や堅堀といった防御施設が確認された。 |
| 32 | やくしどう 薬師堂 | 薬師如来 <small>やくしによらい</small> の坐像 <small>ざざう</small> と十二神 <small>じゅうにしんしやう</small> 将 <small>まつ</small> 他 <small>まつ</small> が祀られている。勧請年月は不詳だが、安永3年(1774)の『風土記御用書出』に堂宇 <small>どうう</small> のようすなどが記載されている。薬師如来は瑠璃光如来とも呼ばれており、菩薩 <small>ぼさつ</small> として修行しながら、衆生 <small>しゅじやう</small> を救済 <small>きやうさい</small> しようと12の大願を立て、現世の利益を説かれたといわれている。薬師如来像・仁王像・十二神将像は市の有形文化財に指定されている。 |
| 33 | ひよしじんじゃ 日吉神社 | 勧請年月日は不明であるが、安永3年(1774)の『風土記御用書出』によると、承久年中(1219~1222)比叡山 <small>ひえいざん</small> より勧請した黒川三社の内の一社であるという。また仙台藩の地誌『奥羽観蹟聞老志』によると、弘仁6年(815)に比叡山 <small>ぎやうそん</small> の行尊 <small>ぎやうそん</small> が造営したという。 日吉神社 <small>ひよしじんじゃ</small> の主祭神は大山咋命 <small>おおやまくいのみこと</small> で、比叡山の地主神として坐していたが、後に最澄 <small>さいちやう</small> が延暦寺を建立し天台宗を開き、古くからの山岳信仰と結び付いた。やがて神仏習合思想に密着して延暦寺と並び、深く多くの人々の尊信を受けるようになった。また、最澄が比叡山を山王と称したことから、日吉山王社、山王権現と呼ばれた。日吉神社の鳥居 <small>さんとうとりい</small> は山王鳥居 <small>みやうじんとりい</small> と呼ばれ、明神鳥居 <small>はふ</small> の上に破風型の合掌造 <small>がっしやうづくり</small> を加え、柱の脇には藁座 <small>わらざ</small> (根巻)を付けている。 |

| | | |
|----|---|--|
| 34 | <p>おおしみず せっかん 大清水の石盥</p> | <p>大清水地内に 1960 年頃まで、四季を通じて冷たい清水が湧き出していた。昔からこの街道を歩き来する人々ののどを潤し心身の疲れをいやし元気づけてくれた冷たい清水であった。伝承によると、新妻豊前<small>にいづまぶぜん</small>という武士が病気で倒れた家臣ののどを潤すために、持っていた槍の先（石先）で岩を掘ったところ冷水が湧き出たという。伊達吉村公（伊達政宗の子、忠宗の第 4 子）がこの地での狩りの途中で、この清水をしばしば利用されたともいわれている。</p> <p>また、石盥には多くの人馬の利用により汚れていた水場を清潔に保つために平胤久が石盥を設置したことや、享保丁酉（1717）年の年号などが刻まれている。</p> <p>名物であった富谷の茶とともに、大変親しまれていたが、昭和 62 年、国道 4 号線の改修工事に伴って従前地より 100m ほど南に移設・復元した。現在は市の有形文化財に指定されている。</p> |
| 35 | <p>あかいしじんじや 明石神社</p> | <p>明石宮前の丘陵<small>うがのみたまのみこと</small>に倉稻魂命が祀られた明石神社が鎮座している。応永 4 年（1397）に神明社としてこの地に村民が勧請したとされている。</p> <p>明石の地名の由来としては、この神社の入口にある巨岩が赤褐色<small>せきかつしよく</small>だったからだと、南北朝時代（1336～1392）の南朝方の武将であった明石長門守高宗<small>あかいしながとのかみたかむね</small>が居住していたからだと伝えられている。</p> |
| 36 | <p>こやだてあと 小谷館跡</p> | <p>この館跡は江戸時代の文献である『石積村御用書出』によれば、小谷備後<small>こやびんご</small>という武将が天正年間（1573～1592）まで居城したとされているが、規模等の詳細については記載が無く不明である。山中には切り立った崖があり、山頂部には建物があつたと推定できる平場もみられ、往古の姿を想像させる。</p> |
| 37 | <p>さかきりゆうえいだいかぐら 榊流永代神楽</p> | <p>鹿島天足別神社<small>かしまあまたりわけじんじや</small>には氏子によって伝えられている神楽がある。この神楽は岩切<small>あおそ</small>（青麻）に伝わる神楽を弘化 5 年（1848）移入したものである。</p> <p>言葉や歌詞を用いずに、大太鼓、小太鼓、笛の調べにあわせて表現する優雅なもので、現在は 12 座が伝承されている。市の無形民俗文化財に指定されている。</p> |
| | <p>アカガシ</p> | <p>鹿島天足別神社境内にあるアカガシは高さ約 20m、幹周約 5.8m で、樹齢は 5 百～6 百年と推定される。当地方にはまれにみる古木で、昭和 38 年、町の天然記念物に、その後平成 18 年、県の天然記念物として指定された。</p> |
| 38 | <p>かしまあまたりわけじんじや 鹿島天足別神社</p> <p>かめいし 亀石</p> | <p>この神社は延喜式内社<small>えんぎしきないしや</small>で、陸奥国百座のうちの一社で、常陸国の鹿島の神である武甕槌命<small>たけみかづちのみこと</small>、下総国の香取の神である経津主命<small>しもうさのくに</small>を祀っている。この二柱の神は武勇をもって知られ、蝦夷征伐に出兵した人々の武運長久や旅の安全、さらに東国から来た兵士や、農民の守護神として尊厳を集め祀られた神社で、勧請年月日は不明である。</p> <p>この神社の傍らに亀の形に似た大石があり、里人は大亀とよんでいた。大明神の地にあるので、神社名（大亀明神）となり、さらに村名（大亀）となったといわれる。この石は現在では亀石とよばれており、市の史跡に指定されている。</p> |
| 39 | <p>おのめだてあと 小野目館跡</p> | <p>この館跡は、江戸時代に仙台藩から幕府へ書き上げた『仙台領古城書上』などの文献や伝承によれば、中世にこの地方を治めていた黒川安芸守家臣<small>すずきみの</small>の鈴木美濃が天正年間（1573～1592）まで居城したとされ、規模は東西五十間、南北二十間とある。山頂部には建物があつたと考えられる平場があり、その周辺には空堀等の防御施設もみられる。</p> |

| | | |
|----|-----------------------|---|
| 40 | みずばしょうぐんせいち 水芭蕉群生地 | <p>天然記念物 ミズバショウ（水芭蕉）</p> <p>本州中部地方以北の湿原に群生するサトイモ科の多年草。二ノ関原在家山は富谷市内では唯一の群生場所で、約 120 m²の範囲に中心のとうもろこしの様な黄色い花と美しい純白色の<small>ぶつえんぼう</small>仏炎苞が帯状に沢を埋める。天然記念物として市文化財に指定されている。</p> |
|----|-----------------------|---|

民間による設置の標示板解説文

| | | |
|--------|------------|--|
| 民 1 | かめすぎ 亀杉 | <p>今から 400 年程前、藩祖伊達政宗公がこの地で一日鷹狩りを催した際、日頃ちよう愛の鷹を放ったところ、何故か日頃の元気を失い急に落下し、その場で死んでしまった。政宗公はひどく悲しまれ近所の農家から素焼きの瓶<small>かめ</small>をもらいうけて、鷹を土中に手厚く葬いその傍らに杉を植えたという。</p> <p>その後杉は大木に育ち四方に枝を張り広げて見事な枝ぶりの杉の大木になった。このように鷹を瓶に入れて葬ったところから、この杉を「瓶杉」転じて「亀杉」とよぶようになった。</p> <p>現在は市の天然記念物に指定されている。</p> |
|--------|------------|--|

